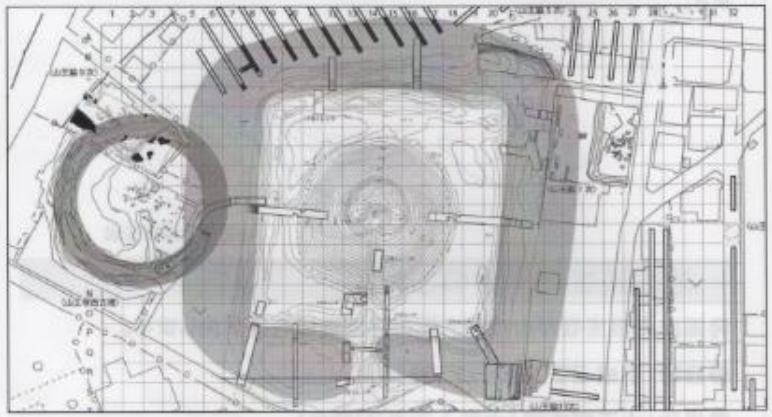
山王塚古墳発掘調査見学会

墳形：上円下方墳

規模：日本最大

山王塚古墳。

山王塚古墳発掘調査見学会



日時：平成29年９月30日（土）

1回目 10:00～11:00

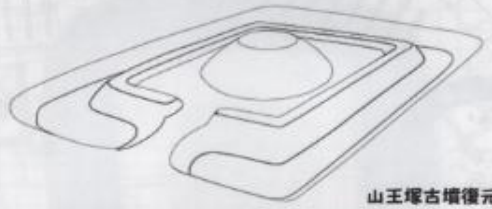
2回目 14:00～15:00

川越市教育委員会

山王塚古墳とは？

上円下方墳は７世紀後半から８世紀初めに造られた終末期古墳です。全国的にも珍しく現在までに６例しか確認されていません。山王塚古墳はその中でも最大の規模を誇ります。

山王塚古墳は、これまでの発掘調査で7世紀後半に造られたこと。また、周溝の幅を広くしたり、下方部の縁に土手を築くなど規模を大きく見せるために工夫されていることなどがわかりました。周溝外での一辺は85mにも及びます。



山王塚古墳復元図

発掘調査見学会のご案内

発掘調査担当者が山王塚古墳の発掘現場をご案内します。

●日時：平成29年9月30日（土）

●場所：山王塚古墳（大塚１丁目21ほか）

●交通：西武新宿線南大塚駅より徒歩20分

※車は旧大東公民館駐車場（20台）を使用

※駐車場が狭いため、ご来場には公共交通機関をご利用下さい。

●お問合せ：文化財保護課（049-224-6097）

左手に現地案内板があった/ここを右手に行く

見学会会場のテントが見える/左手の墳丘が山王塚古墳

既に何人か集まっている

今回の発掘に伴う出土品が展示されている

りょくでいへんがん
緑泥片岩
河原石
（チャート・砂岩など）
かくせんせきあんざんがん
角閃石安山岩
はくへん
（剥片）

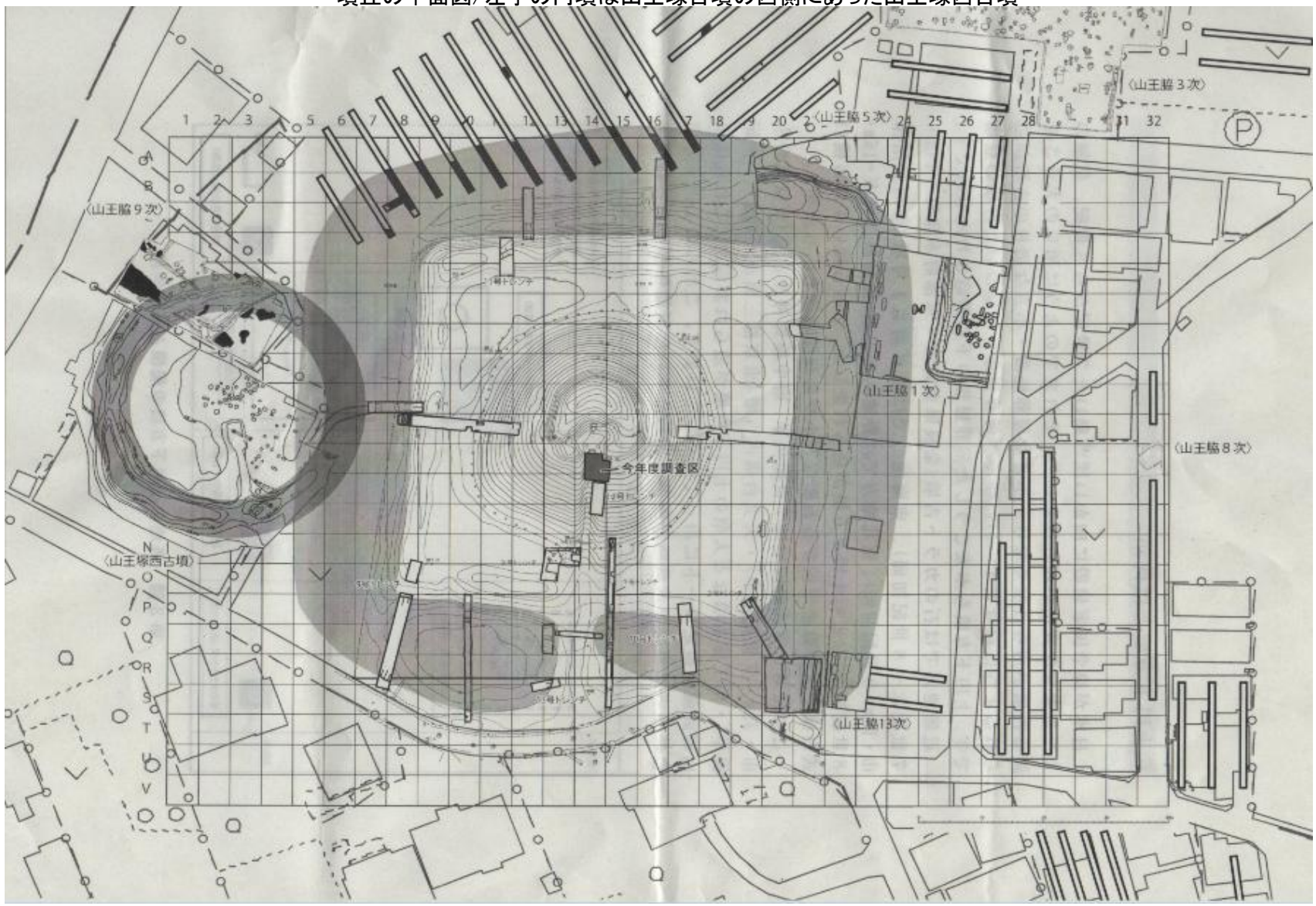
かくせんせきあんざんがん
角閃石安山岩
（加工石材）

宋銭「至道元寶」
(10 世紀末 ;995 年 -99 年)
須恵器（7 世紀）
宋銭「聖宋元寶」
(12 世紀初頭 ;1101 年)
青磁（13 世紀）

さて、前方が山王塚古墳の墳丘で、今立っている辺りは周溝が巡っていた場所、その先が方形部、更にその先のマウンドが円形部

東日本最大の上円下方墳とされる

墳丘の平面図/左手の円墳は山王塚古墳の西側にあった山王塚西古墳



発掘調査見学会配布資料/川越市教育委員会　より

墳頂に山王社が祀られているので鳥居が立っている/今立っている辺りは方形部の場所

左手を見たところ

右手を見たところ

さて、墳頂に登ってみよう

今回の発掘調査は墳頂の埋葬施設である横穴式石室を上面から面的に掘り下げたと云う/南側から見たところ

中を覗き込む

正面をアップで見たところ

その左手を見たところ

同じく右手を見たところ

反時計回りに覗き込む/東側から見たところ

北側から見たところ

西側から見たところ/僅かに石材が残っている

13世紀以降に堀返されて盗掘にあっていて、石室を構成する石材も大部分が別の用途に転用されてしまったと考えられるとの事

墳頂には幾つもの石造物があった

墳頂を北側から南方向に見たところ

振り返って北方向を見たところ/下は方形部

さて、これは周溝跡の南西角辺りで南側から北方向を見たところで、右手前方が墳丘

左手を見ると大きな建物が立っているが、その場所で山王塚西古墳が発掘されているようだ

右手の墳丘をアップで見たところ/方形部の先に円形部が見える

方形部から見た円形部

そこから方形部を北方向に見たところ/右手が円形部、左手は周溝跡

その周溝跡と山王塚西古墳が発掘された場所を見たところ

これは方形部の北西角辺りで北側から南方向を見たところで、左手前方が円形部

同じく、西側から東方向を見たところで、右手前方が円形部/左手が周溝跡

これは北側から南方向に、方形部から円形部を見たところ

これは方形部の北東角辺りで北側から南方向を見たところで、右手前方が円形部/左手は周溝跡

これは東側から西方向に、方形部から円形部を見たところ

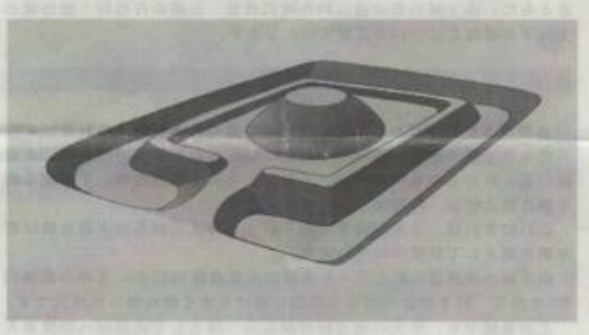
そこで少し退いて墳丘を見たところ

これは南側の方形部で東側から西方向を見たところ/右手が円形部、左手は周溝跡

市指定史跡

山王塚古墳

発掘調査見学会 資料



平成29年9月30日（土）

川越市教育委員会

1 はじめに

山王塚古墳は、全国でも珍しい上円下方墳として、昭和33年に市指定史跡となりました。

これまでこの古墳の周辺では何回かの発掘調査が行われていますが、山王塚古墳の年代・被葬者等その実体は未だに明らかではありません。

こうした謎に迫る第一歩として川越市教育委員会では、平成24年度に墳形確認のための発掘調査を実施しました。

その後、詳細測量調査や埋葬施設の地下レーダー探査等を行い、本年度は主体部の遺存状態を確認するための発掘調査を行っています。

今回の発掘調査見学会では、最新の発掘調査の成果をご覧いただくとともに、山王塚古墳の造られた時代背景・近隣の古墳群・他地域の上円下方墳などについてご説明いたします。

2 山王塚古墳の造られた時代

古墳は3世紀半ばから7世紀にかけて造られた高塚式のお墓です。

考古学では3世紀半ばから4世紀に造られたものを前期古墳、5世紀に造られたものを中期古墳、6世紀のものを後期古墳、7世紀を終末期古墳と呼び、時期区分しています。

これによれば、7世紀後半に造られたと考えられる山王塚古墳は終末期古墳として位置づけられます。

山王塚古墳が造られた7～8世紀は大化改新（645年）、壬申の乱（672年）を経て、日本が律令国家の建設に向け大きく揺れ動いた時代です。

この地域でも、中央の地方経営政策の一環として武蔵国への渡来人の移住がはじまり、霊亀2年（716）には高麗郡が建郡されます。

また、7世紀末には山王塚古墳の西方を南北に貫いて古代の官道である東山道武蔵路が建設されます。

古墳の出現以来権力のシンボルとして造られ続けてきた前方後円墳は、この時代すでに築造されなくなり、各地に初期寺院が造られるようになります。この近辺では、7世紀後半に創建された勝呂廃寺（坂戸市）や8世紀初頭の女影廃寺（日高市）などが有名です。

このように、旧来の体制が崩れ、新たな制度・価値観が創出される激動の時代に山王塚古墳は造られたのです。

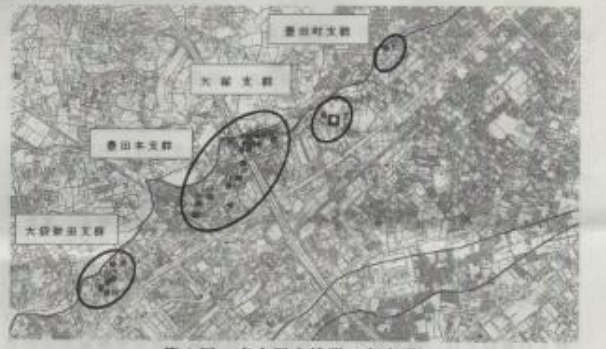
3 南大塚古墳群について

川越市内には下小坂古墳群（小畔川左岸台地）・的場古墳群（入間川左岸台地）・仙波古墳群（仙波台地北東縁）などの古墳群があります。これらはいずれも河川に臨む台地の縁辺に位置しています。

山王塚古墳の属する南大塚古墳群は入間川右岸にあり、台地縁辺に沿って約3㎞にわたり古墳が点在しています。現在の入間川街道沿いに古墳が分布していると言うとわかりやすいでしょう。これらの古墳は大きく4つの支群に分けられます。地名をとって西方から、大袋新田支群、豊田本支群、大塚支群、豊田町支群と呼んでいます。

現在27基の古墳が確認されていますが、開発により消滅した古墳もあり、現存するのは本来の数より少なくなっています。これまでの調査から本古墳群は、小規模な前方後円墳（南大塚4号墳）と多くの小円墳からなる群集墳であり、5世紀前葉から7世紀代にかけて造られたことがわかっています。大塚支群に属する上円下方墳・山王塚古墳は最終段階の古墳と考えられ、これ以降、古墳は造られなくなります。

なぜこの場所に造られ、誰が眠っているのか、古墳時代の終りと古代の始まり、ふたつの時代をつなぐ謎を解く鍵となるのが山王塚古墳であると言えるでしょう。



第1図　南大塚古墳群の各支群

4 これまでの発掘調査の成果

史跡内容確認のための山王塚古墳の発掘調査は平成24年度に開始しました（第1次調査）。この時の発掘調査では、上円下方墳という墳形が確実であることが確認されました。

続く平成25年度には墳形の詳細測量調査を行い、幅広い周溝や下方部外縁を巡る土手など、築造当時の状況を示す微妙な起伏が現在も遺されていることが明らかとなりました。

平成26年度には上円部の地中レーダー探査を行い、八の字形に開く前庭部をもつ10mを越える規模の複室構造の横穴式石室が存在することが判明しました。

平成27年度の発掘調査（第2次調査）では、山王塚古墳の墳丘を巡る周溝部の調査とともに墳丘を東西方向に立て割り、ローム土で版築された横穴式石室の拵え積みを確認することができました。

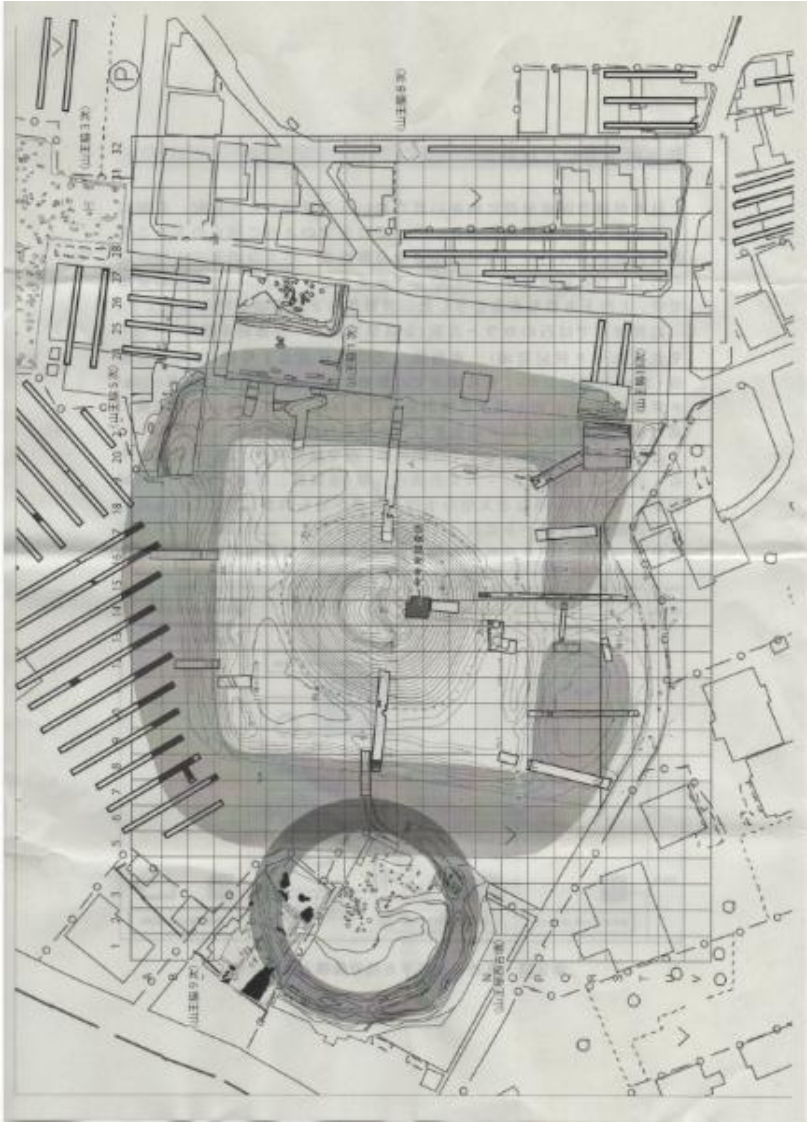
平成28年度の発掘調査（第3次調査）では、周溝の補足調査を行い周溝外縁での一辺が80mを越えること、また横穴式石室の前庭部から出土した須恵器から、7世紀後半に築造されたことがわかりました。

5 今回の発掘調査の成果

今回の発掘調査では昨年度調査地点のさらに墳頂よりにトレンチを設け、埋葬施設である横穴式石室を上面から面的に掘り下げています。レーダー探査から想定された石室の位置、規模、構造また石材などを確認することが今回の調査の目的です。しかし、残念ながら現在までの調査で得られた石室に関する情報はほんのわずかにすぎません。

トレンチ内を部分的に深掘りしたサブトレンチでは、石室の大半が後世の掘り込みによって壊されていました。どうも大規模な盗掘が行われていたようです。埋土内から出土した中国の宋銭や青磁などの年代から、13世紀以降に掘り返されたことは間違いありません。また、石室を構成する石材の大部分も見当たらないことから、この時に持ち去られ何らかの別の用途に転用されたものと考えられます。

盗掘をまぬがれた大形の緑泥片岩製の板材や盗掘坑から出土したチャートや砂岩などの河原石、緑泥片岩の破片、角閃石安山岩の破片や加工石材などは、山王塚古墳の石室の石材や構築過程を推定する貴重な手掛かりとなります。

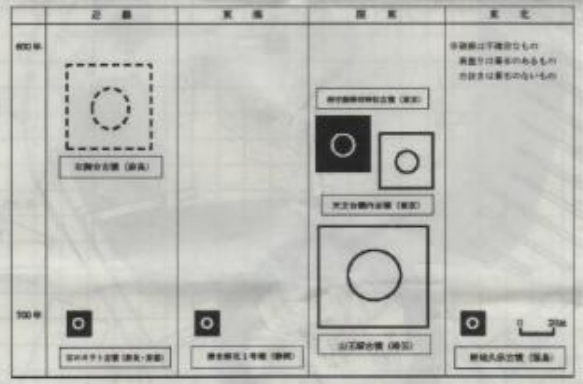


6 上円下方墳とは何か

日本が律令国家建設に向かい揺れ動いた７世紀から８世紀，墓制の上でも大きな変化が起こりました。それまでのように墳丘の大きさを誇る古墳が造られなくなり，小さな埋葬施設・小さな墳丘の古墳が造られるようになります。いわゆる「薄葬思想」に基づいた古墳の登場です。上円下方墳も本来こうした薄葬思想の下に築造されたものです。

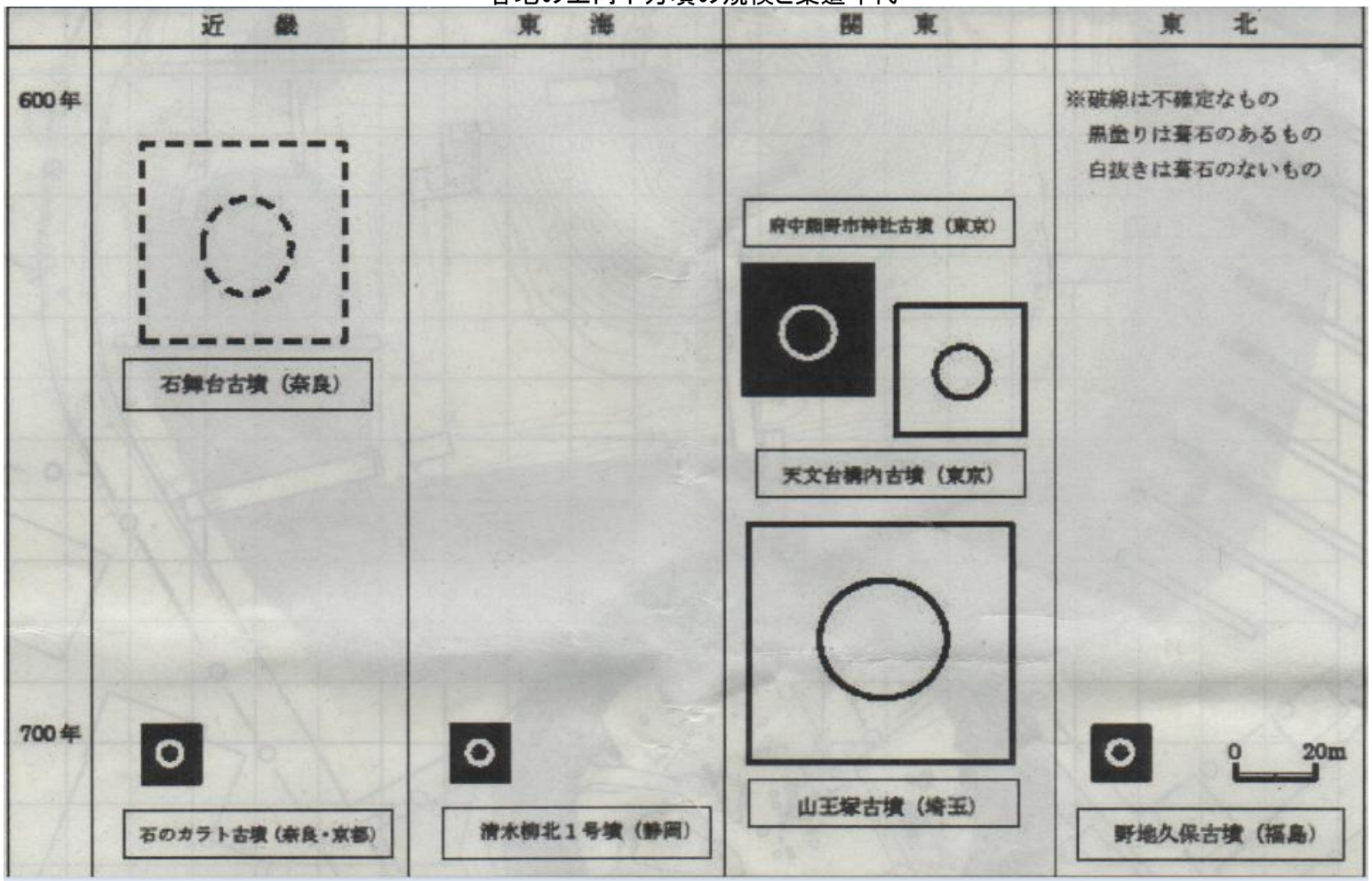
近畿地方では石のカラト古墳（奈良県奈良市～京都府木津町・14m・７世紀末～８世紀初頭），東海地方では清水柳北１号墳（静岡県沼津市・13m・８世紀初頭），東北地方では野地久保古墳（福島県白河市・16m・８世紀初頭）などの上円下方墳が造られました。これらはいずれも横口式石槨や火葬骨を埋納する石櫃など小型の埋葬施設をもちます。

これに対して武蔵国では７世紀後半，府中熊野神社古墳（東京都府中市・32m・７世紀後半）・天文台構内古墳（東京都三鷹市・30m・７世紀後半）・山王塚古墳など大型の上円下方墳が造られました。これらは東山道武蔵路推定ルートに沿って分布しています。これらの上円下方墳の被葬者は東山道武蔵路の開削に関わっていた可能性が考えられます。



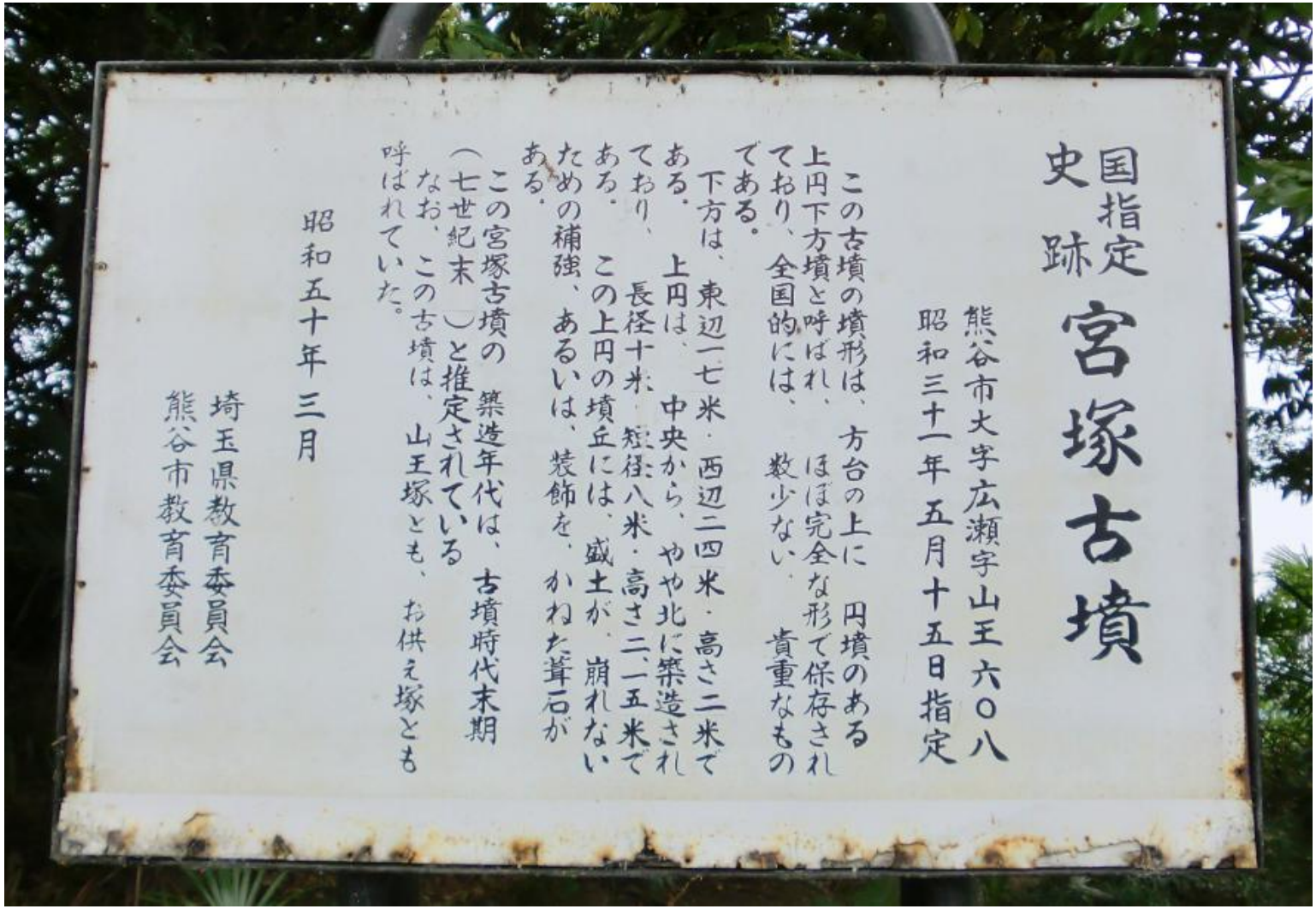
第３図　各地の上円下方墳の規模と築造年代

各地の上円下方墳の規模と築造年代



※関東では宮塚古墳（7世紀末/熊谷市）も上円下方墳とされる

その宮塚古墳



国指定
史跡

宮塚古墳

熊谷市大字広瀬字山王六〇八
昭和三十一年五月十五日指定

この古墳の墳形は、方台の上に円墳のある上円下方墳と呼ばれ、ほぼ完全な形で保存されており、全国的には、数少ない、貴重なものである。

下方は、東辺一七米・西辺二四米・高さ二米である。上円は、中央から、やや北に築造されており、長径十米・短径八米・高さ二、一五米である。この上円の墳丘には、盛土が、崩れないための補強、あるいは、装飾を、かねた葺石がある。

この宮塚古墳の築造年代は、古墳時代末期（七世紀末）と推定されている

なお、この古墳は、山王塚とも、お供え塚とも呼ばれていた。

昭和五十年三月

埼玉県教育委員会
熊谷市教育委員会

これは天文台構内古墳

三鷹市
Mitaka City

天文台構内古墳

この古墳は土を盛って造られ、周囲を巡る堀(周溝)によって方形に区画された１段目と、その上に円形の２段目が築かれた「上円下方墳」と呼ばれる古墳のひとつの形です。

墳丘内部に築かれた横穴式石室は、切石を用いていること、遺体を安置する玄室及び前室と羨道の複数の部屋を有すること、玄室の平面形が三味線の胴のように外側に張り出していることも大きな特徴です。また、墓前域の両側壁の石積み施設はこの地域の石室の特徴です。

玄室の床面に副葬品の須恵器（フラスコ形長頸壺）と土師器(坏)が発見され、これらの土器の想定される年代が７世紀の中頃（651～675年）であることから、その頃に造られた古墳と考えられます。

前方後円墳など大形古墳が造られなくなった古墳時代終末期に、上円下方墳の武蔵府中熊野神社古墳(府中市)や、石室の形が似ている北大谷古墳（八王子市）とともに、この地域を治めていた豪族の墓と考えられます。

三鷹市　0422-45-1151

墳丘と石室（ の位置から）

須恵器・土師器（西から）

羨門付近（南から）

これは武蔵府中熊野神社古墳/山王塚古墳をはじめ、これらの古墳は東山道武蔵道推定ルートに沿って分布しており、これらの上円下方墳の被葬者は東山道武蔵道の開削に関わっていた可能性が考えられると云う

武蔵府中熊野神社古墳の概要

■飛鳥時代の上円下方墳

本古墳は、7世紀の中頃の飛鳥時代に築造された、上が丸く、下が四角い上円下方墳です。古代の中国では、天はドームのような半球形で、大地は四角いものと信じられていました。この考えを「天円地方」といいますが、このような宇宙観や思想を背景として築造されたと考えられています。

■方角

古墳の中心線は、真北より約7度西へ向いていますが、古墳の築造にあたって方角を意識していたものと考えられます。

■古墳の大きさ

墳丘の規模は、3段目の上円部の直径約16m、2段目の下方部の一辺約23m、1段目の下方部の一辺約32mを測ります。墳丘の高さは、3段目の墳頂で約6mあります。墳丘全体の中心は、石室の一番奥の部屋（玄室）の中心に合わせるように設計されていました。

■埋葬された人物

武蔵府中熊野神社古墳が、全国でも類例の少ない上円下方という墳形の古墳であることや、副葬品の質の高さから、その被葬者（埋葬された人物）はおそらく東国の有力者であったと考えられます。残念ながらその人物名は、当時の文献や記録、古墳出土品に名前を記したものがないためわかりません。

古墳の保存と整備

■遺構の保護

古墳の保存は、まず本来の古墳が壊れないように、石室（遺構）や調査のため掘り下げた穴を埋め戻し、補強して遺構を保護しました。さらに、その上に土を盛り、保護層を確保して、古墳の復元工事を行いました。

■古墳の復元的整備

築造当初に近い形態で復元を試みています。古墳1段目の下方部の大きさと墳頂の高さは、本来の古墳と同じ大きさ・高さに復元していますが、上円部の直径と2段目の下方部の大きさは遺構を保護するため実際に出土した面より、1mほど大きくなっています。また、石室入り口（羨道部）を復元した切石組は、下の遺構を保護するため、実際より2mほど前方に造りました。

貴重な出土品

■鞘尻金具

石室の中で見つかった鞘尻金具（刀の鞘の末端に付ける金物）は、鉄製の地金に銀で模様がつけられています。この模様の中に7つの円文（○）で構成される「七曜文」があります。「七曜文」は、同じ頃に作られた国産初の貨幣「富本銭」にみられるだけで、このほかに出土品としては国内外にはまったくみられないものです。「七曜文」もまた、古代の中国の思想を表したもので、当時の日本では最新文化としてとり入れられたものと考えられます。

国史跡 武蔵府中熊野神社古墳

National historic site
Musashifuchu Kumanojinja Shrine Tomb

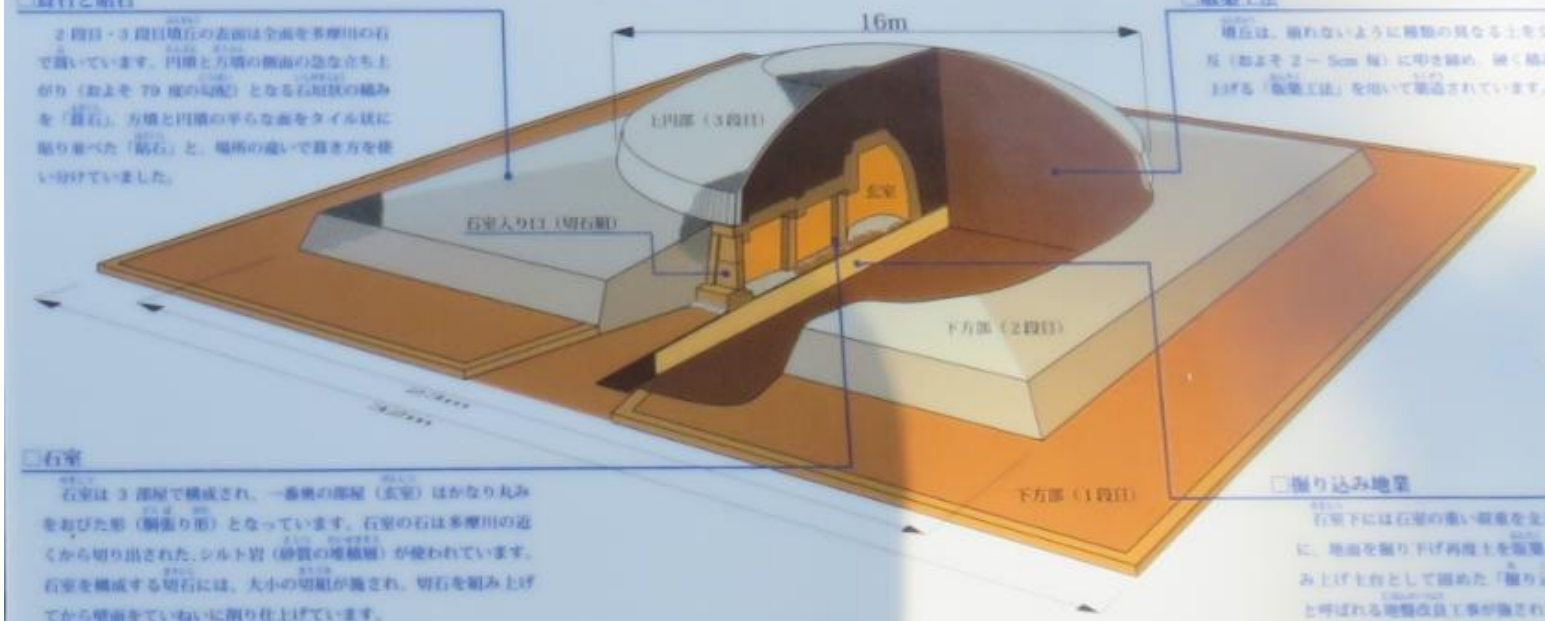
古墳に使われている技術

□葺石と貼石

2段目・3段目墳石の表面は全面を多摩川の石で葺いています。円墳と方墳の側面の急な立ち上がり（およそ79度の勾配）となる石垣状の積みを「葺石」、方墳と円墳の平らな面をタイル状に貼り並べた「貼石」と、場所の違いで葺き方を使い分けていました。

□版築工法

墳丘は、崩れないように種類の異なる土を交互（およそ2～5cm幅）に叩き締め、硬く積み上げる「版築工法」を用いて築造されています。



□石室

石室は3部屋で構成され、一番奥の部屋（玄室）はかなり丸みをおびた形（胴張り形）となっています。石室の石は多摩川の近くから切り出された、シルト岩（砂質の堆積層）が使われています。石室を構成する切石には、大小の切組が施され、切石を組み上げてから壁面をていねいに削り仕上げています。

□張り込み地業

石室下には石室の重い荷重を支えるために、地面を掘り下げ再度土を版築工法で積み上げ土台として固めた「張り込み地業」と呼ばれる地盤改良工事が施されています。

鞘尻金具

七曜文　長さ4.1cm、幅3.5cm

陰陽五行思想の木、火、土、金、水と日（陽）、月（陰）の七曜（星）を表した古代中国の考えをもとに考案された文様といわれています。

大刀の推定図

石室入り口

玄室内部

葺石出土状況

本古墳は、熊野神社、熊野神社氏子会をはじめ地域の方のご理解・ご協力で、調査・

府中市